

OMNIBUS

大阪医科大学図書館報 / 大阪医科大学附属看護専門学校図書室報

| C | O | N | T | E | N | T | S |
|---|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|
| | 作文 | 習練 | の | 勧め | 〔森 浩志〕 | _____ | 2 |
| | “書き | 残し” | の | 勧め | 〔長澤史朗〕 | _____ | 3 |
| | 病んだ | 身体に | 宿る | 心を | 癒す | 病床 | からの |
| | 眺望 | —21 | 世紀 | の | 医療 | 環境 | (4)— |
| | 〔牧 | 彰〕 | _____ | | | | 4 |
| | 「入院 | 体験 | を | 通して | 〔中山 | サツキ〕 | _____ |
| | _____ | | | | | | 5 |
| | 図書館 | 業務 | 電算機 | の | 機器 | 更新 | について |
| | _____ | | | | | | 6 |
| | 他大学 | 図書館 | 訪問 | 記 | (8) | (京都 | 大学 |
| | 医学 | 図書館 | の | 巻) | _____ | | 8 |
| | 書評 | 「や | っと | 名 | 医 | を | つ |
| | か | ま | え | た | ; | 脳 | 外 |
| | 科 | 手 | 術 | ま | だ | の | 七 |
| | 十 | 七 | 日 | 〕 | 〔安 | 田 | 峯 |
| | 子〕 | _____ | | | | | 9 |
| | ジャー | ナル | セ | ミ | ナ | ー | '99 |
| | に | 参 | 加 | し | て | 〔 | 茂 |
| | 幾 | 周 | 治〕 | _____ | | | 10 |
| | お | 知 | ら | せ | _____ | | 11 |
| | 本 | 学 | 教 | 職 | 員 | 著 | 作 |
| | 寄 | 贈 | _____ | | | | 11 |
| | 業 | 務 | 日 | 誌 | _____ | | 12 |
| | 編 | 集 | 後 | 記 | _____ | | 12 |



T.K.

作文習練の勧め

森 浩 志



学生は教師にあだ名を付けたがる。今、私にどんなあだ名が付いているか知らないが、私の学生時代、*dementia vulgaris*（痴呆にこんな亜型があるか確かでないが）なる尊称を奉られた教授がおられた。ご自分のノートを読み上げ、学生に逐一筆記させる、講義中の質問は受け付けない、という講義スタイルだった。隔世の感があるが、昭和30年代半ばでは取り立てて不思議な光景ではなかったように思う。教科書（参考書）の種類が少なく、なによりも親のすねが細くて本格的な教科書を買う余裕のなかった貧乏学生の集まりだったからである。後になって読み返してみると、自身でも判読できない悪筆の走り書きであるが、直後には講義内容をよく記憶していたと思う。自分で筆記していたからである。痴呆防止に手仕事は効果的というのと同じであろう。時代が移り、カラー印刷の分厚い教科書が選り取り見取りに溢れ、講義プリントもワープロで作成され保存される。スライド呈示もパソコンを使って自由自在な、便利な世の中になった。さてそれで、教育効果が上がったか、なによりも学生諸君がよく勉強して賢くなってきているかと考えると、そうとは思えない。参考書を、あるいは上手に纏められた他人のノートを一枚10円でコピーし、アンダーラインすると、それだけで勉強したつもりになる。試験をすると、教えたはず、聞いたはずという教授錯覚を痛感させられることになる。教育に王道はない。「あんな講義は授業料をドブに棄てるようなものだ、自分で勉強する。あんな教師になるものか。」というのも立派な反面教師である。

ワープロは実に便利である。カナ入力すれば漢字に変換してくれ、横文字綴りをスペルチェックしてくれる。私は15年前までは講義直前に講義プリントを手書きで作成し替えていた。文字は辞書に当たって正確を期した。ところが今ではフロッピーに保存してある原稿を手直しする程度のズボラさになったので、自然、文字を読めても正確に書けなくなった。ときどき、黒板に字が書けず、学の無さを露呈する仕儀となる。学生諸君にしても、試験をすると小学生ではあるまいに、もう少しまともな文章が書けないのか、という誤字に溢れた、カナ文字だらけの答案にお目にかかる。これはまだお愛嬌の範囲である。

切り貼り自在もワープロの特性である。起承転結があって初めて筋の通った文章になる。思いつくままに単文を作り、それを前に置き、後ろに移して論理を推敲するのはお手のものである。パソコン時代の学生諸君にピッタリの機能ではないかと思うのだが、ことはそう簡単でない。日頃の作文習慣があるか、ないかであろう。高等学校で進路を決めるとき、算数や理科が得意だから（論理的な）理系、不得手だから（叙情的な）文系と勧められる。しかし算数や理科が不得手だから論理性が乏しいということにはならない。一般に長文は筋が通ってなければ意味不明となる。時折、新聞でお目にかかる裁判の求刑や判決文章は、原稿用紙1枚ほどにピリオドが一つしかない長文である。それでも見事に筋が通り、理解に困難はない。進路指導では医学部は理系に分類されているようだが、疑問に思う。入学許可の選別に算数や理科が必要でも、医師になってから必要なのは、自分の銭勘定ができることと乾電池のプラスとマイナスを間違えない程度で充分ではないかと思う。大事なのは病人の心の襲を読みとることと、筋の通った話をし、文章を書くことだと思う。Accountability（説明義務）が求められる世の中になったので、なおさら筋の通った話が要求される。

ワープロの三つ目の特性は、文字の美しさである。ワープロというよりプリンターの機能であるが、ミミズの這ったような判読困難な肉筆よりも、規格品であっても読みやすい文書が歓迎される。それにつけても思うのは、ワープロや複写機のなかった時代の人の教養である。下書きをいくつも重ねて推敲するでなく、巻紙に墨痕鮮やかにすらすらと、したためるのは驚嘆すべき教養である。これには二つの意味がある。一つは「書は人を聞く」で、肉筆の風格である。ミミズの這った文字は自分の品格を表しているようで、恥ずかしい思いをする。二つ目は頭の中での推敲である。起承転結の整った原稿がなければ書にはできない。いささか飛躍するが、鍋島藩の『葉隠れ』が、「小事の思案は深くすべし。大事の思案は軽くすべし。」と教えているのと、軌を一にするように思われる。原理原則の大事は日頃頭の中で反芻していれば、いざ事に臨んで確認するだけで足りるということであろう。とは言いながら、新しいことが次々と出現して理解・記憶するに迫られる凡人には難しい知的作業である。

（もり・ひろし 第二病理学教授）

“書き残し”の勧め

長澤史朗

だいぶ以前から、安価で、通勤や旅行の携帯に便利で、また仰向けで読んでも腕にやさしい文庫本を好むようになりました。読み終えて印象深いものを本箱にしまいました。その後何度か書籍の整理をしましたが、その時にも記憶に残っているものだけを手元に残していまに至っています。

最初のうちは日本の推理小説を中心に作家をきめて読み込んでいましたが、類似点が多い印象は否めず、多彩な変化が楽しめそうな翻訳小説を読むようになりました。人物の名前は覚えにくいものの、すでに話題になった小説を選んでいるせいでしょうか、購入時の期待が大きくはずれることは少なくなりました。やがて興味はSF小説から現代史・東西冷戦・南北問題などを扱ったフィクション小説に移っていきました。日本と異質の政治・文化・軍事状況などを背景にした広大な時間・空間のうねりの渦中に吸い込まれるような緊張感と充実感をあじわうことができました。

ジェイムスホーガン（創元推理文庫）、フレデリックフォースイス（角川文庫）、AJクイネル（新潮文庫）、ロバートラドラム、Jグリシャム、クライブカッスラー（新潮文庫）、トム克蘭シー（文芸春秋）の作品は好んで読みました。今でも年1冊のペースで完成される後2者の長編は大きな楽しみの一つですし、また時にふれてこれまでの作品を読み返す時もあります。ホーガンの“創世紀機械（The genesis machine）”にみられる核兵器封じ込めのアイデアは、昨今のインド・パキスタンの核実験や極東のテポドン騒動に携わる当局者の努力をあざ笑っていると感じさせるほど、現在でも斬新かつ痛快です。また克蘭シーの一連の作品は、ストーリー展開の妙味だけでなく、事件との葛藤を通して一作ごとに主人公ライアの行動規範をリフォームし、その人となりや成熟させる作者の構想の豊かさが魅力の源泉のように思います。幾つかの作品は映画化されましたが、この変化を伝えることは難しいようです。多くの人に馴染み深い週刊連載コミックをリメイクした“美味しんぼ”は、文庫本でこそありませんが、食文化のテーマに加えて、ロマンス、家族、環境などの問題を軽快なタッチで扱った優れ物で、現在71冊に至っています。“読んでいて絵がにじんでくるような話題がある”と聞いたこともあります。



人の思考や行動の緻密さと大胆さ、その影響力や波及範囲、正道を歩むことの難しさ・美しさ・悲しさなど、多くの要素が綾をなして展開するこれらの作品を創作し、その活動によっておそらく自分自身をリファインする作者とは、うらやましく、また不思議な人達であると思つづく思います。

いくつかのことが契機となって、読んだもの、聞いたもの、見たもの、感じたり考えたことなどを、その時々“書き残す”ようになりました。特にワープロが使えるようになると、とりあえずメモのように書き置き、時を改めて読み直す・書き直す・書き深めることが簡便になりました。

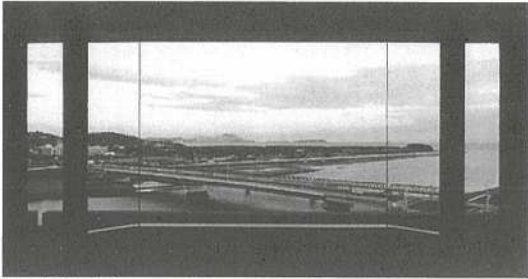
本学に奉職した1991年から、脳神経外科同門内のスムーズな情報伝達と意志疎通を目的に“同門会ニュース”を毎月郵送しております。このニュースレターに、“学会参加記、最近の話題、私と脳外科”などとテーマを決めて原稿をお願いしたり、あるいはフリーテーマで多くの投稿をいただきました。“手紙も書けない忙しさは、人間として恥ずかしい”と、永六輔が“大往生”のなかで書いていますが、“手紙”を“自分を映し出すクリップボード”と解釈すれば、至言であると思います。

心の琴線にふれる時々の事柄を気軽に書き留めることの繰り返しが、何がしかの考えをまとめたり、節目をつくる契機になるように思います。“書き残し”の勧めをさせていただきつつ、ここで筆をおきます。（本文の一部は、1991年の脳神経外科同門会誌に掲載した文章を転載したものです。）

（ながさわ・しろう 脳神経外科学助教授）

病んだ身体に宿る心を癒す病床からの眺望—21世紀の医療環境（4）—

牧 彰



船の操舵室をイメージした病室の窓から陽光にきらめく瀬戸内の海と島々を一望する

の弁明も出来ませんでした。他の患者の困惑と憐愍の入り交じった眼差にも、若かった私には辛く耐え難い思いでした。

O市立病院は、白いタイルの外壁とブロンズ色の窓ガラスの昭和40年代初頭に出来た病院です。当時は施設の設備維持費を抑えるために、事務所などの窓ガラスに熱線吸収ガラスが使われ始めました。しかし、医療には知識と経験の他に「患者への思いやり」が不可欠のように、病院設計では特に設計者の「人間性」が問われているのです。O. ヘンリーの短編小説「最後の葉」を引用するまでもなく、病床の窓はその象徴です。設備負荷を抑えるために、自然の色合に見えない窓ガラスの採用は論外です。病院に真に必要なのは医療のための「機能性」と弛まざる「人間愛」なのです。当時の建築技術を駆使したこの病院の寿命はわずか四半世紀でした。施設の耐用年限には物理的・機能的・社会的要因等がありますが、いずれにも増して「市民の愛着」の如何が大切です。建築設計を志す者は、この事をしっかりと心に銘記すべきでしょう。開院直後から市民の支持を得られなかったこの病院も、建築設計の本質を見失ったことによる哀れな犠牲者であると言えます。

赤穂市民病院は近畿一の清流・千種川の河口にあり、眼下に千種川に連なる瀬戸内の海を、遙かにオリブの花香る小豆島を望む絶好の立地条件です。それだけに、「療養環境の向上」のために立地の特性を最大限活かして、自然の緑・光・風を積極的に取り入れた病棟配置が望まれます。敷地形状や法規制等から病棟は自ずと南北に長くなり、病室の居住条件として不利な東西からの採光を避けるために中廊下は止めて、正方形のループ状の廊下を対角線上に二つ繋げて南北を堅軸とする平面形としました。これにより、各病室は余す所無く日照が得られ、四方向の各々特徴のある眺望を楽しめます。ここは明治期までは川の真中にあったこともあり、病室の窓は千種川を遡る船の操舵室をイメージして、陽光にきらめく瀬戸内の海や清流を一望出来るように突き出しました。外周部に巡らした消防活動用のバルコニーは、所轄消防署と綿密な調整をして病室から瀬戸内の海を支障無く俯瞰しやすい程度に低く抑えました。換気窓は両側に最小限にして、窓の中央部には眺望の妨げになるものは一切設けず、郷土の景観を存分に室内に取り込みました。網戸は眺望を損なわないようにロール式として、常時は窓の框内に納めました。赤穂の美しい景観が療養生活に「潤い」と「安らぎ」を齎らして、「真に患者の病んだ身体に宿る心を励まし、生命の尊さを自覚させ、生きる勇気が培われること」を心から願いました。

建築設計とは言わば「郷土愛」の発露です。まずは地域を良く知り、その地域に愛着を持つことから設計は始まります。市民が市民病院への入院を契機に郷土の自然や景観の素晴らしさに改めて気付き、赤穂の「環境保全」の大切さに目覚めてくれるならば、設計者としては望外の幸せです。何故なら、建築家の役割は「環境を守り・景観を創る」ことに他ならないからです。新市民病院が市民の皆様へ心から歓迎され、愛され親しまれる施設として末永くその使命を全うすることを、その建設に思い託した一人として切に希求しています。

（まき・あきら 元日建設計社員 本学総合研究棟・本部図書館棟設計担当）

「入院体験を通して」

中山 サツキ

一昨年8月に、生まれて初めて入院患者の体験をしました。大阪市内のある病院で開腹手術を受け、個室に2週間ほど入院したのです。今まで病院の中を覗くといえば、ほとんど看護者の立場だったのですが、いざ自分が入院患者になってみると……。病院の玄関に入る時には、何となく新鮮な感じと少し不安な気持ちが入り混じった思いだったのを憶えています。手術は無事に済み、その後の経過も何とか良好で予定通りに退院できましたが、この入院体験を通して、一患者としてあらためて発見できたこと―私自身の看護を見直す契機になったことがいくつかありました。今回は、その中から2つのことについてご紹介したいと思います。

一つは、手術を受ける患者の家族の気持ちについてです。当初、医師から「(手術は)約2時間で終わります。」と言われていたので、家族にもそのように伝えていました。ところが、いざ当日になってみると2時間をとうに過ぎても私は手術室から出て来なかったのです。外で待っていた家族は、心配性も手伝って「何か起こったのでは……。」としきりに気をもんだようです。後で聞いたところでは「万一の事も考えた。」などと縁起でもないことを言っていたので、相当に不安だったのでしょう。そんな家族の不安を鎮めてくれたのは、手術室から出てきた婦長さんだったそうです。婦長さんは手術の状況について、予定より遅れているが特に問題はないこと、あと半時間くらいで終わりそうなことなどを説明してくれたということです。その説明の前後では待ち時間の不安が全然違った、と家族は言います。

その話を聞いて、私も看護婦として勤務していた頃の自分を反省させられました。“家族への配慮”ということは、解っていたつもりでも、前述のような細やかな気配りは実践できていなかったように思います。医療者側にすれば、手術時間が予定の30分や1時間ぐらい超過するのは、さほど珍しくないことだと解っています。しかし、手術に不慣れな患者の家族にとっては、予定時間の僅かな超過が大きな不安につながることもあるのです。

2つ目は、病室のドアのノックについてです。手術当日の夜から翌日の午前中まで、激しい吐き気が続き、嘔吐の繰り返しで私は一睡もできませんでした。「こんなに辛いことは生まれて初めて……」と愚痴を言う程、創部痛よりも何よりも吐気と嘔吐による苦痛が大きかったです。苦しさが我慢できずナースコールを押し、看護婦さんが部屋に来てくれるまでの時間―実際にはそれほど経っていないはずの、その僅かな時間がとても長く感じられました。そんな時は、看護婦さんが急いだ調子でドアをノックしてくれるのがとても待ち遠しかったのです。“コンコン”という音と殆ど同時に部屋に入って来てくれた時には、「この看護婦さんは、急いで来てくれたんだ。」と安心感を覚えたのでした。

ところが、人間の心理は不思議なもので(少なくとも私はそうだったのですが)、数日して状態が落ち着いてくると、看護婦さんが性急なノックとほぼ同時に部屋に入ってくるのに対して、あまり良い気がしなくなったのです。それどころか、自分の落ち着いた時間と空間が侵害されたような気持ちになったのです。ドアをノックするスピードや病室に入るタイミングさえも、患者の気持ちに影響する場合があります。しかも、その時々患者の状況で、同一の行為が全く異なる感情を招くとは……。しかし、よく考えれば当然のことかもしれません。

ただ、実際の勤務の中では、そこまで配慮するのは容易なことではないように思います。私自身、無意識のうちに“常に、急いで行く”看護婦になっていた気がします。でも、状態の安定している患者さんの病室をノックする時は、入室前に一呼吸おいて……。そんな余裕のある心配りが大切な場面もあるのです。

入院体験を通して、私が気づいたことを二つ紹介しました。どちらも、言ってみれば“ほんの些細なこと”なのですが、そういった些細なことについても、患者さんや家族の方々にとっては非常に重要なことかもしれない……。そんなふうに考えることって、私達の看護を変えていく大きな“きっかけ”になるのではないのでしょうか。

(なかやま・さつき 第二看護学科専任教員)

図書館業務電算機の機器更新について

すでにOMNIBUS（館報）No. 11でお知らせいたしましたとおり、今回、図書館業務電算機器が更新されました。これにより図書館カードが新しくなり、従来の図書館カードは使用出来なくなります。カードの切替え手続きについては、図書館のカウンターでお尋ねください。

新規の機器構成の概要は以下のとおりです。

1. 新システム名

LibVision ver. 2（IBM社）

2. 機器構成図

機器構成図は図1のとおり

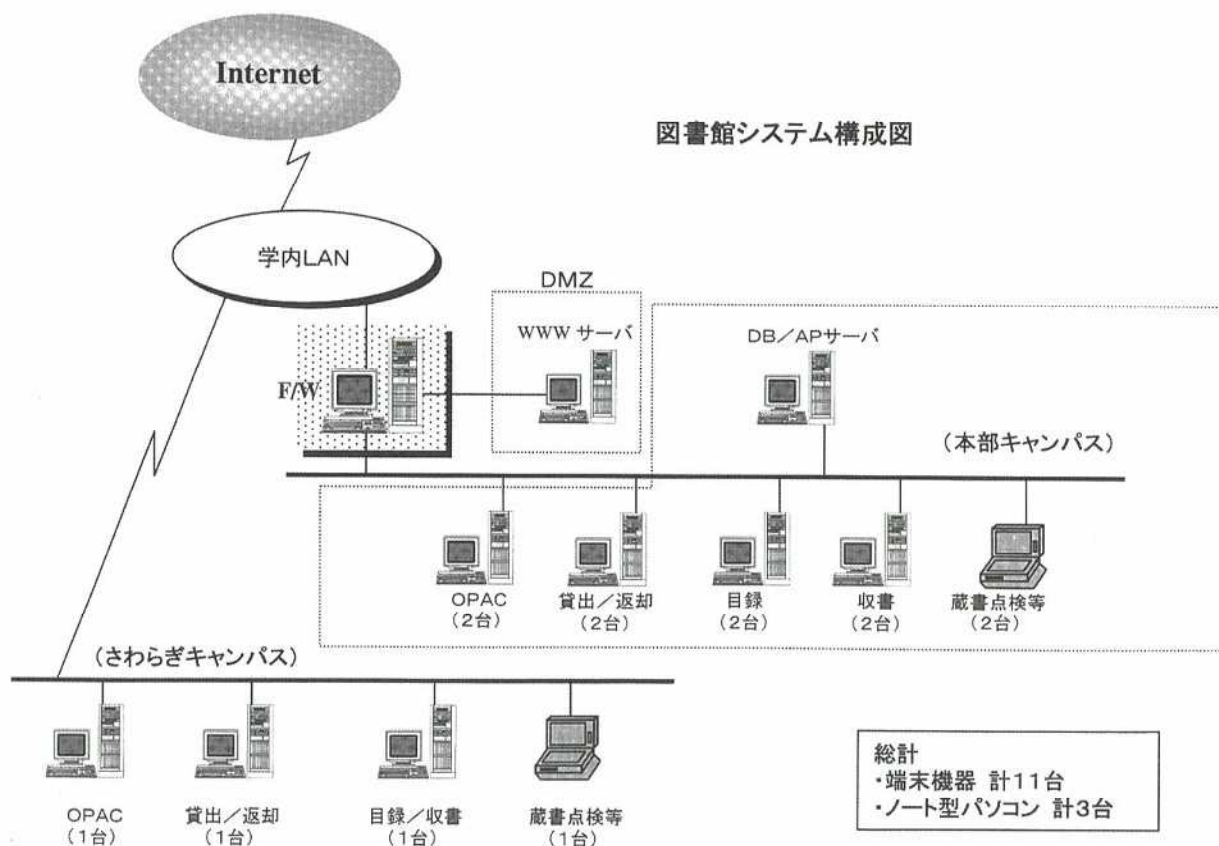
3. 導入スケジュール

平成11年9月初旬

4. システムの特徴

- 1) 2000年問題に対応した。
- 2) 文部省学術情報システムの新CAT/ILLに対応した。
- 3) オープンシステムを採用することにより、図書館の図書、雑誌情報が学内LAN経由でいつでも、どこからでもaccess可能とした。

図-1



文献情報検索システムの機器更新について

図書館では、現在文献情報検索システムとして、MEDLINE、Current Contents、医学中央雑誌のデータベースを提供していますが、この度、2000年問題、ディスク容量の増設等に対応するために、CD-ROMサーバシステムの機器を更新しました。

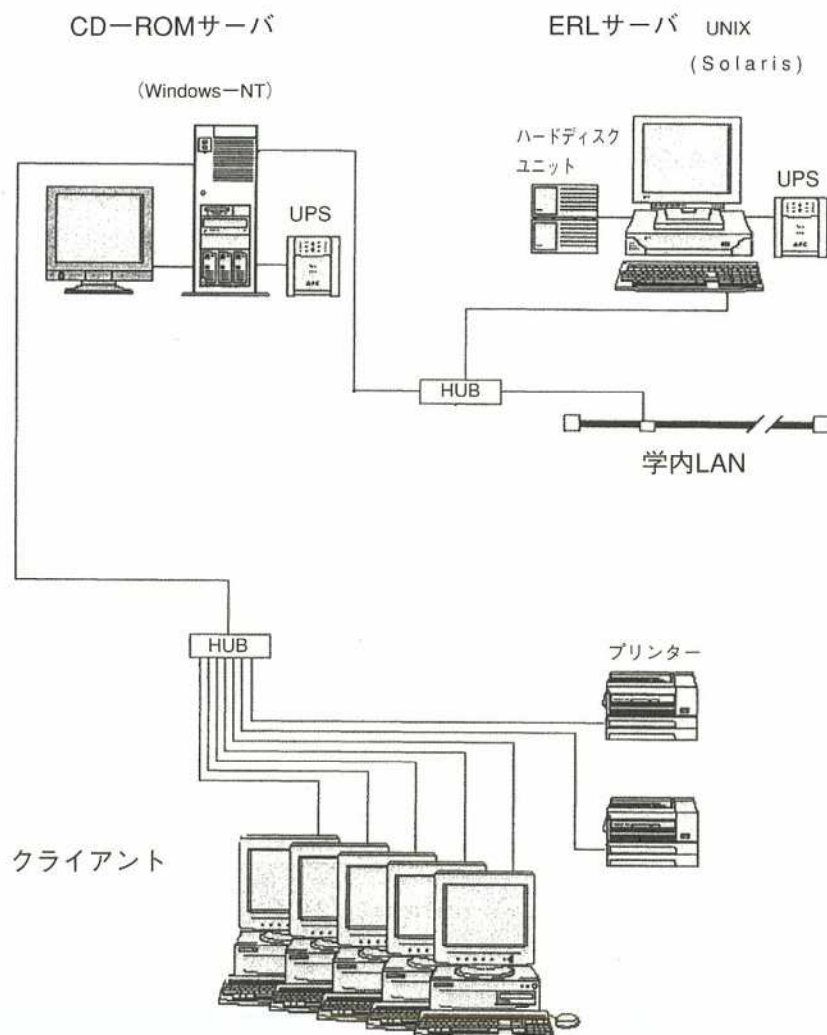
今回の機器更新にあたり、ERLシステムのversion up (4.0) を図りました。ERLとは、ERL (Electronic Reference Library) と言って、米国SilverPlatter社のCD-ROMをネットワークで利用するためのシステムです。このversion upにより、二次情報データベースから一次情報データベースへのリンクが可能になりました。

具体的には、MEDLINEで検索した雑誌論文の情報は抄録までしか付いていませんが、その論文が本学で登録している、On-line journalであれば、リンクすることにより、その論文の全文が入手可能になります。つまり、利用者は全文入手のために、いちいち冊子の雑誌を探し、複写する必要がなくなるわけです。

現在ProQuest収載タイトル中、MEDLINEにあるタイトルについてはリンク付けが終わりました。MEDLINEを検索して、求める論文のタイトルがProQuestにあれば全文が入手出来ます。図2は、今回更新したCD-ROMサーバシステムの機器構成図です。

CD-ROMサーバシステム機器構成図

図-2



京都大学医学図書館は、京都市左京区吉田近衛町にあります。医学部附属病院の北側、近衛通を
はさんだキャンパスを入ってすぐの所です。



医学図書館外観

現図書館は、1965年に開館された3階建ての独立棟です。

1階入口を入ると、右手にカウンター、左手に目録カードおよび新聞コーナーがあります。カウンターの正面にコピー室としてコピー機が3台設置されています。

奥に進むと、雑誌閲覧室があり、新着の和・欧雑誌および二次資料類が配架されています。新着雑誌架は、雑誌表紙が見えるように配架できるものと、通常の書架で約10cm間

隔に仕切り板を入れ、未製本雑誌を立てて収容できるようになったものが設置されています。立てたまま配架されていますので、取り出しやすくなっています。こちらには、OPACおよびネットワークで提供されているMEDLINE CD-ROM、スタンドアロンで提供されている医学中央雑誌、JCRの利用ができる端末が設置されています。さらに奥には書庫があり、全部で4層になっています。1層部分は、欧文雑誌1980年以後のものが配架されています。

2階は、単行書閲覧室で1980年以後の和・洋単行書および参考図書が配架され、軽読書室、自由討議等に利用できる学生談話室、AV Roomがあります。

奥の書庫は、2層部分に和文雑誌のバックナンバーが、3層部分に欧文雑誌の1979年以前のもものが配架されています。

3階は、会議等に利用できるセミナー室、視聴覚室と併用されているAV資料の閲覧もできる個人閲覧室があります。奥の書庫は、4層部分で欧文雑誌の1979年以前のものおよびロシア語の雑誌が配架されています。

その他、別棟として1979年以前の単行書、二次資料のバックナンバー等を配架した第二書庫があります。

雑誌資料については、電子ジャーナルの導入が図られ、Hige Wire Press、Science Direct (SD21) 等を導入されています。当館でも、Proquest Direct等の電子ジャーナルを導入しておりますが、今後も図書館として、ネットワークを生かしたサービスを充実させていくとともに、利用者の方にそれらのサービス内容を広く知ってもらい、利用してもらうための対応も重要となっていくと思われま



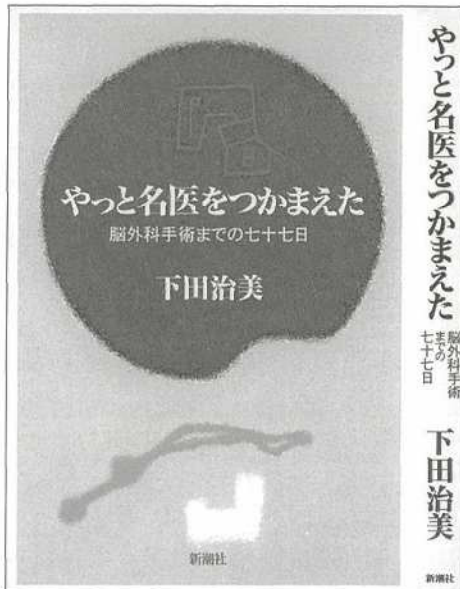
OPAC用端末

(福広)

やっと名医をつかまえた 脳外科手術までの七十七日

下田治美 著 新潮社 1999年

安田 峯子



「母親ってやつは……」「ぼくんち熱血母主家族」「愛を乞うひと」などの著書があり、「愛を乞うひと」は昨年映画化され20万部を越すヒットとなった下田治美さん。いつも何事にも精力的に取り組んでいる姿にエールを送ります。

一体名医とは何なのか— それぞれの患者がもつ固有の症状における名医なんて誰れも知らない。医者だって知らない。患者は病気と闘うまえに全力をあげて自分だけの唯一の名医を戦闘的に探さなければならない。’97年の春“脳動脈瘤”と診断された下田さんが、その脳外科手術を受ける日までの間、身をもって体験した医療現場の実情の記録である。

それは小さな違和感から始った。まるで頭蓋骨が金だらいでできていて、それを棒きれでガンガン乱打されているような激痛、夜中のこととてただ我慢する以外になく、ひたすら朝がくるのを待ったが、ついに辛抱しきれ

なくなって救急車を要請した。救急指定病院Aに運ばれたが、睡眠中にたたき起こされた医師は不機嫌でとげとげしく叱声を浴せる。しかもこの医師を始めとして続く医師一人、ナース二人計四人とも点滴の針が入らない。「こんな痛がる人、珍しいんじゃないのッ。はじめてみたよッ」とすべて非は患者にあるとばかりに罵倒された。

A病院から精密検査を受けるように言われ文化人御用達の病院のうちの1つB病院へ行く。しかしこの病院で感じたことは診療においても貧富の差があるらしいことだった。

B病院はおそらく利潤追求のために、不必要な検査・投薬をおこなうだろうし、濃厚治療も。というわけでB病院を捨てた下田さんは、今後どうしてよいかわからず、我々が一般にするであろうように知人に「誰か良いお医者さんをご存知ありませんか」と尋ねC大学病院のC医師を紹介して貰う。しかしこのC医師は患者より自分が大事なお医者様。それでも患者は耐えねばならない。しかしいくら患者でも忍耐には限度がある。日によって医師の診断が違ったり、必要以上の点滴を打たれたり。目の前で繰り返された医療ミスや医者の暴言が、今までごくあたりまえだと思っていたこと、何の疑問も抱かなかったことに対して患者を次から次へと不信感に変えた。決定的な不信を感じた彼女は敢然とその医師との縁を断ち切り「私達は自分の命をほんとに無造作に人の意のままにされている。名執刀医をこの手で探し出そう」と決心する。

いま世の中にはありとあらゆる情報があふれている。医療界独自の情報もある。友人の手を借りいつ破裂するかわからない瘤を抱えて必死の思いでかつまた戦闘的に探し求めてやっと見つけた彼女にとっての名医、それが“ケーシー”こと中込先生だった。

「彼は良心のある人、名医とは常識人であることなんだなあと思いました。そして自分の限界をきちんと知っている人。私は知りもしないことを知ったかぶりするのが普通の医者だと思っていた。自分の能力はここまでですと患者に表明できるのが名医です」と言っています。でもこれは「私にとっての名医なんだけど、別の患者さんにとっての名医かどうかはわからない」。でも「名医はかならず存在する」というのが彼女の結論です。

医者対患者の関係の前に人対人で接する心構えをもつこと—患者の側の意識改革が今いちばん大切なことではないでしょうか。

どうしたら名医に出会えるのか、具体的なヒントが沢山詰まった一冊です。大衆の代弁者として、今日の医療現場を患者の視線でとらえ小気味よくまとめています。

(やすだ・れいこ 数学助教授)

ジャーナルセミナー '99に参加して

茂 幾 周 治

平成11年8月5日(木)に、紀伊国屋書店が主催するジャーナルセミナーが梅田スカイビルで開催された。今年で三年目になり参加者も国、公、私立の大学図書館、企業の研究所関係者と、広範囲にわたり約80名の人に参加した。以下はその時のセミナーの報告である。

1. 1999年海外出版社の動向(雑誌部長 筆保洋一郎氏)

まず始めに2000年の外国雑誌の値上げ予想について話があった。各社まだ値段を決めかねており、現時点では約10%程度の原価アップになろうとの予測であった。

昨年と今年の為替レートの変動を比較すると、今年は約5%円高傾向で、このまま円高が推移すると、予算は5%アップで済むかも知れないとのことであった。

次に、海外出版社の経営状況について話があった。1997年は、電子ジャーナルが出版され、1998年は二次資料と一次資料のLinkがおこなわれた。1999年は電子ジャーナルのパッケージの最適組み合わせが考えられているとのことであった。必要な論文にどのように容易にアクセス出来るかが課題であり、出版社ごとに提供している電子ジャーナルは使い勝手が悪いとの評価である。これからの電子ジャーナルの提供は、各ユーザ毎に品質の開発が必要であろうとの話だった。

2. 電子ジャーナルをめぐる新しい動き(営業企画部長 牛口順次氏)

1) この一年間の電子ジャーナルの動き

質的变化はあまりなく、一種の膠着状態にある。AP、IDEAL社は、1999年から代理店からコンソーシアムの役割に変わってきている。Elsevier社が来年から外国雑誌価格を円建てで値付けする予定であり、このことは国内業者間で問題となっている。

2) 電子ジャーナルを本格的に利用するためにはどうすれば良いか

一定基準の利用環境がなければ不便である。そのための環境整備が必要である。また、システムダウン、トラブルへの対応等が出来る経験者が必要である。紀伊国屋書店としては、電子ジャーナルの利用を含めた、総合インターフェイスであるK-Portというシステムを開発中であり、今年の秋には顧客に公開できるとのことであった。

3) デモンストレーション(電子情報部 青木均、高橋信二氏)

SILVER LINKERとOCLCとのECOのシステムのデモがあったが、インターネット回線の状況が悪く、デモはあまり巧くいかなかった。希望があれば、各顧客ごとに現場でデモをすることであった。

4) ケーススタディー

1) 外国雑誌の高騰による代替システムの導入—大阪医科大学図書館の場合—(茂幾周治)

2) 総合大学におけるECOの有効制分析(大阪営業部長 才田泰宏氏)

以上二つのケーススタディーの報告があった。

その後参加者との質疑応答があり、約4時間のセミナーは終わった。このジャーナルセミナーも三年目を迎え定着してきたような感がする。時期を得たセミナーであったと思う。

(もぎ・しゅうじ 図書館課長)





1. 図書館カードが新しくなりました。

図書館業務システムおよび入館システムが更新されましたので、図書館カードが新しくなりました。新図書館カードは、バーコードが1つになりました。

貸出・返却業務は9月13日より、入館システムは10月1日より稼働しています。

図書館利用の際は、必ず図書館カードをお持ち下さい。

入館時はもとより、カードがないと貸出ができません。

カードは、事前に作成したものは各所属に配布済みです。学部学生の方で、まだお持ちでない方は、2年生から6年生までは図書館カウンターで、1年生はさわらぎ分室で受け取ってください。

お問合せは、図書館カウンター（内線2799）までお願いします。

2. OPAC用端末の増設

図書館所蔵資料検索のためのOPAC用端末が、2階カウンター横の2台に加えてこのたび3階階段横に2台と、地下1階コピー機横に1台を増設しました。

ぜひご利用ください。

3. 携帯品にご注意

図書館内におきまして、かばん等の携帯品にはくれぐれもご注意ください。

特に、財布等の貴重品は身につけていただくようお願いいたします。

4. 平成12年度外国雑誌40タイトルを購入中止

図書館備付け外国雑誌について、平成12年度購入タイトルを40タイトル中止することになりました。これは、来年も外国雑誌の価格が約10%値上がりするためです。但し、為替レートが約5%以上円高になる見込みなので、実質的な購入予算は、5%アップ程度で済むかもしれません。

図書館としては、今回で3年連続外国雑誌を中止してきているので、平成13年度はタイトルの中止はしない方向で考えています。皆様のご協力をお願いいたします。

5. 新規受入雑誌（看護専門学校図書室）

眼科ケア 1 (1999) +

コミュニティケア 1 (1999) +



本学教職員著作寄贈

武内敦郎（本学名誉教授）

新人ナースのための心電図モニタリング入門／武内敦郎著、メディカ出版 1999

図書館業務日誌

- | | |
|--|---|
| <p>6月</p> <p>3日(木) 次期図書館システム打合せ会 (於、図書館会議室)</p> <p>16日(水) 日本医学図書館協会総務会(於、 協会中央事務局)</p> <p>18日(金) 次期図書館システム打合せ会 (於、図書館会議室)</p> <p>22日(火) 日本医学図書館協会企画・調査 委員会(於、天理よろづ相談 所)</p> <p>23日(水) BMA library Tony McSeanセミ ナーに館員参加(於、大阪歯大 附属天満橋病院)</p> <p>24日(木) 館長規程検討委員会(於、図書 館会議室)</p> <p>30日(水) 日本医学図書館協会資料保存委 員会(於、本学図書館)</p> <p>7月</p> <p>1日(木) 日本医学図書館協会理事会(於、 本学図書館)</p> <p>7日(水) CD-ROMサーバシステム更新打 合せ会(於、図書館会議室)</p> <p>9日(金) 医学情報処理センターUser会 (於、第二会議室)</p> <p>13日(火) 次期図書館システム打合せ会 (於、図書館会議室)</p> <p>16日(金) CD-ROMサーバシステム更新打 合せ会(於、図書館会議室)</p> <p>19日(月) 日本医学図書館協会分担購入検 討委員会(於、日本医大)</p> | <p>22日(木) 図書館合同運営委員会(於、図 書館会議室) 学術情報センター新CAT/ILL システム講習会に館員参加(於、 京大農学部)</p> <p>23日(金) 医学情報処理センター運営委員 会(於、第7会議室)</p> <p>26日(月) 日本医学図書館協会将来計画委 員会(於、国立公衆衛生院)</p> <p>29日(木) 園田学園女子大学図書館関係者 が見学来館(二名)</p> <p>8月</p> <p>3日(火) 館報15号編集委員会(於、図書 館会議室)</p> <p>5日(木) 紀伊国屋書店ジャーナルセミナ ー'99に館員参加(於、梅田ス カイビル)</p> <p>20日(金) ノートルダム女子大学図書館館 員見学来館(三名)</p> <p>23日(月) -24日(火) 学術情報センター ILL地域講習会に館員参加(於、 大阪大学)</p> <p>24日(火) 日本医学図書館協会将来計画委 員会(於、国立公衆衛生院)</p> <p>26日(木) 図書館合同運営委員会(於、図 書館会議室)</p> <p>27日(金) 次期図書館システム打合せ会 (於、図書館会議室)</p> |
|--|---|

編 集 後 記

今回のトップ記事は、森浩志教授に、また、エッセイは長澤助教授にお願いしました。「二十一世紀の医療環境」のシリーズは、四回目になります。今回は、図書館業務システムが新しく更新しましたので、その関連記事を掲載しました。その他沢山の方に執筆して頂き、有り難うございました。表紙のカットは、北村達郎氏にお願いしました。読者のみなさんからの投稿をお待ちしております。

(茂幾)

OMNIBUS「大阪医科大学図書館報／大阪医科大学附属看護専門学校図書館報」

No.15号 1999年10月22日 発行

編集・発行 大阪医科大学図書館

〒569-8686 大阪府高槻市大学町2-7

TEL (0726) 83-1221

(内線2799, 2621)

印刷 大日本印刷株式会社